

教育目標		すすんで学び 心身ともに健康で 思いやりのある人になる
めざす学校像：	①生徒の人格が尊重される学校 ②豊かな人間関係が育む学校 ③生徒の未来を見据えた学力を育む学校	
めざす生徒像：	「自己表現し、認め合える生徒」(令和4年度改訂)	
めざす教師像：	①生徒の人格と多様性を尊重する教師 ②より良い集団をつくり個々を育てる教師 ③ 授業を通して生徒の未来を明るくする教師	

項目			中期目標	短期目標	具体的方策	努力指標 (中間)	努力指標 (最終)	成果指標 (中間)	成果指標 (最終)	分析コメント	改善策
学習指導	1	基礎	既習事項を次の学習や生活に活かしていく視点で、基礎的・基本的事項の習得を図る。	基礎的・基本的な知識・技能の向上を図る。支援型、個別最適化型への授業改善を目指す。	①教室前面を整理し、授業の目標と流れを明示し、見通しをもって授業に臨めるようにする。 ②板書の工夫、ノート指導、小テスト、ワークシート、繰り返し学習、タブレットPC活用などを通して学力の定着を図る。 ③数学、英語の少人数指導、レポートや課題学習により、個に応じた指導を行う。	3	3	3	3	◎ 中間評価に比べ、生徒・保護者、教員とも数値の向上が見られた。研修会等を通して授業改善に取り組んだ結果であると考えられる。	◎ 次年度も、ICTの活用や個別指導等の方策を見直し、基礎的・基本的事項の習得・定着を図る取組を継続していく。
	2	活用	主体的・対話的で深い学びを標準とし、ICTを高度に活用した指導技術の改善を図る。	各教科での学びによる見方・考え方を生かし、総合的な学習の時間を改善する。	①探究学習や、実験・観察・作品作りなどにおいて、対話する場面を設定し、生徒同士が協働しながら学べるようにする。 ②活動のゴールを明確にし、習得した知識や技能を活用しながら解決が図れるようにする。 ③自分やグループ班の考えを文章にまとめたり、発表することができるようにする。	3	4	3	4	◎ グループでの発表や表現など、対話を取り入れた授業や国分寺学の取組が、このような高評価につながったと考えられる。	◎ 今後も国分寺学をはじめとし、学校公開などで活動的な授業を積極的にに行い、学校での取組内容を保護者や地域に広めていく。
	3	評価	生徒の努力と成果に対する、適正な評価・評定の実施。	公的学力調査結果などを踏まえ、適切な評価基準を定める。	①保護者会で年間指導計画・評価計画を全家庭に配布し、授業予定を理解してもらう。 ②評価材料の配点等を生徒に周知し、評価方法の詳細について授業で説明する。 ③生徒による学校評価を7月、12月に行い、次年度の学習指導に活かしていく。	3	3	3	3	◎ 中間評価の結果を受け、学校全体で評価・評定への認識について共通理解を図り、生徒にとってわかりやすい評価となったことが結果に表れたと考えられる。	◎ 次年度は、年度当初に評価・評定についての理解を確認する研修会を行うことで、より信頼される指導・評価を目指していく。
	4	道徳	特別の教科 道徳を適正に実施する。指導方法と評価方法を刷新する。	考え議論する道徳授業への質的転換への試みを図る。	①「考え議論する」授業で多様な価値観を認め合い、生き方について考えを深めさせる。 ②弁護士によるいじめ防止授業やがん教育、つばさ教室による授業などの内容が、教育活動の中で生かせるような授業を実践していく。 ③学習内容を1冊のノートに記録することで、振り返りや変容を確認できるようにする。	3	3	3	3	◎ 9月に実施した道徳授業の研修会により、教員の全体的な指導力向上や道徳授業への負担感の軽減につながったことが結果に表れたと考えられる。	◎ 道徳授業の研修会を継続していくとともに、ローテーション授業やお互いに授業を見合う取組などを取り入れ、さらなる授業力向上に努めていく。
生活指導・進路指導	5	人権	生徒の人格を尊重し、個性を伸長しながら、社会的資質や行動力を高める。	人権尊重を基盤とし、生徒一人一人の存在と多様性が尊重される集団を育む。	①人権意識を高め、生徒がクラスや学年の枠を越えてお互いを大切にできるようにする。 ②いじめ防止基本方針に基づき、教室環境、言語環境を整え、校内の全活動を通していじめの未然防止、早期発見、早期対応を図る。 ③「四中からいじめをなくしていくために」を生徒に配布・指導し、人権尊重の意識を高める。	3	3	4	4	◎ 教員の人権意識は高いものの、生徒・保護者の評価が上がっていない。人権の配慮が当たり前となってきたことが、こうした結果になったと考えられる。	◎ これまで同様、人権尊重を基盤とし、生徒の存在と多様性が尊重される集団を育む取組を継続するとともに、道徳や特別活動等で人権的な課題を意図的に取り入れる。
	6	支援	様々な困難のある生徒の内面理解を深め、適切な支援を行う。	障害者差別解消法に基づき、困難を抱える生徒・保護者への支援を行う。	①障害者差別解消法に基づき、合理的配慮（生徒の特性に応じた個別の配慮）を行う。 ②冊子「四中のサポート体制」を配布し、全保護者に特別支援教育について理解を得る。 ③つばさ教室、教育相談室、トライルーム、子ども家庭支援センターと連携して、生徒や家庭の支援を行う。	3	3	3	4	◎ 生徒・保護者の評価が下がっている。教育活動の中での特別支援教育的指導や、特別なものでなくなってきたことから考える。	◎ 今後も継続して、困難を抱える生徒・保護者への支援を行う取組を継続するとともに、特別支援教育コーディネーターを中心とした組織的対応を心掛けていく。
	7	安全	生徒の危機管理意識を高めるとともに、自他の命や安全を守るようにする。	情報通信機器および巨大地震を中心に危機管理意識を高める。	①情報通信機器についてセーフティ教室を実施し、生徒と保護者双方の理解を深める。 ②巨大地震発生に備えた防災教育、薬物乱用防止教室、救急救命講習などの安全教育に取り組む。 ③さまざまな状況を想定した避難訓練や講話を実施し、常に真剣に災害時訓練に取り組む。	3	3	3	3	◎ 生徒・保護者の肯定的評価も、学校側の評価も上がっている。避難訓練の工夫や、地域防災訓練参加等がこうした結果につながったと考える。	◎ 次年度は地域や市とも連携した防災教育や防災訓練を実施し、有事に生徒が地域のために役立つ人材となるよう指導していく。
	8	進路	生徒の自己理解を深め、生き方を考え、主体的に進路選択ができるようにする。	総合的な学習の時間を活用し、3年間系統的に進路指導を行う。	①将来への希望を抱き、その実現のために進んで考え行動できるようにする。 ②系統的な進路指導により、自己理解、社会理解、情報活用能力を育む。 ③1学年では職業調べ、2学年では職場体験学習及び上級学校体験、3学年では自己の進路選択といった系統的な指導を行う。	3		3		◎ 昨年に比べ、生徒・保護者の肯定的評価が減少している。3年生の進路がはっきりしない時期ということもあり、評価しにくいことが原因であると考えられる。	◎ 今年度より実施している国分寺学は、自分の興味・関心があるものについて、主体的に考え活動する取組である。これは自らの生き方につながる進路指導そのものである。
特別活動・その他	9	学級	学級活動を通して、生徒全員が大切な居場所であることを実感できるようにする。	仲間を大切にした学級づくり(全員が仲間、違いを尊重、礼儀)を推進する。	①仲間を大切に(全員が仲間、違いを認め合う、礼儀を守る)し、学級が大切な居場所になるようにする。 ②教室環境を整えとともに、学習や生活のきまり、仲間を大切にできる学級をつくる。 ③個性や多様性を生かし、係活動等で主体的に活動し、尊重される学級づくりを行う。	3	3	3	3	◎ 生徒・保護者、教員ともに高評価となった。2学期を終え、生徒にとって学級が居場所になってきたことと、教員としても学級がよい形になってきたからと考える。	◎ 次年度に向けて、学級の枠を超え、学年・学校全体が一体感をもち、よりよい居場所になるような学校づくりを、地域も巻き込みながら行っていく。
	10	行事	行事を通して、連帯感と責任感を高めるとともにより良い校風を育む。	本校の伝統と校風を踏まえ、生徒会組織を活用しながら企画・運営を行う。	①運動会と四響祭の2大行事を通して生徒の連帯感と責任感を育む。 ②1学年の校外学習、2学年の移動教室、3学年の修学旅行の実施にあたり、班行動を含めた集団行動ができるようにする。 ③各行事のねらいを系統的に定めて実施することで生徒の自主性と自立心を育む。	4	4	4	4	◎ 生徒・保護者、教員ともに高評価となった。特に四響祭の様々な取組が、生徒や保護者に伝わった結果であると考えられる。	◎ 生徒主体の取組は、このように実りが多い分準備にかかる負担も大きい。CSを活用して、負担を軽減しながら持続可能な活動にしていこうと探していきたい。
	11	自治	自主的・実践的な生徒会活動を通して、学校生活の課題解決を図る。	学校生活や地域社会の課題を自らの課題として捉え、行動できるようにする。	①生徒会活動や委員会活動、ボランティア活動に積極的に取り組んだり、協力したりする。 ②生徒会や各委員会のキャンペーン活動やボランティア活動を、生徒主体で企画・実行させる。 ③学級での当番活動や係活動をリーダーを中心に行い、自治の基礎を身に付けさせる。	3	4	3	3	◎ 2学期は、委員会主体のキャンペーン活動が多かったことが、このような結果につながったと考えられる。	◎ 今後も学校や生徒の状況に合わせた、生徒発生の生徒会活動を取り入れ、生徒たちに自治の基礎を身に付けていく。
	12	特色	生徒、保護者、地域にとって親しめるよう、特色ある学校づくりを推進する。	関係機関や外部講師等の招聘、各活動等から、持続可能な社会を考え、学ぶ。	＜四中の特色ある教育活動例＞ ①朝読書活動を毎期実施し、読書に親しむとともに、一日の始まりを落ち着いたものにする。 ②国分寺学やSDGs探究学習を通して、地域から学び、貢献する態度を身に付けさせる。 ③「自己表現し、認め合える生徒」の育成を目指し、地域とともにある学校づくりを行う。	3	3	3	3	◎ 国分寺学の取組が3年のみクローズアップされる形になってしまったことや、四中の特色が何なのかを理解できていないことが原因であると考えられる。	◎ ①、2年でのSDGsの取組が3年のプロジェクトにつながっていくという流れを意識して指導していくことや、四中の特色について振り返らせる活動を取り入れていく。

解説

この「自己評価書」は、生徒・保護者対象のアンケート結果を基に、努力指標と成果指標を分析し、改善策を提示したものです。

「努力指標」とは、学校側の努力状況です。4（ほとんど達成した）、3（達成できた部分が多い）、2（達成できない部分が多い）、1（ほとんど達成されていない）となります。

「成果指標」とは、生徒および保護者対象のアンケート結果（ABCD4段階）を総合した評価です。AB合計の数値が、90%以上で4、70%以上で3、50%以上で2、50%未満で1となります。